玉子王子　著

一章　ボールにボールが！　そして女の子のドンケツで去勢寸前に

学校のグラウンド。真ん中でバスケットの真似事をしていた体操服の少女たち。
それに、同じ格好の男子が近づいていき、何か話す。
少しして、文句を言いながらも女子たちがその場を離れ、端のほうでまたバスケットを再開する。
女子たちがいた場所で、男子らがサッカーを始める。
その男子の中に、やや小柄な者がいた。
チラ、と女子のほうを振り返る。
――ああ、かわいそうだな。女子だからって先に遊んでたのをどかせるなんて。
あまり面白いとは思えない。
杉関公之輔はため息をつきつつも、クラスの男子らに文句を言うほどの不満は感じない。
結局のところ、自分が押しのける側だから。
不満げな目を向けてくる者に気づく杉関だが、その女子も何か言うでもない。
この学校ではよくある光景だった。

各学年一つのクラスしかない小さな高校、遠堀高校。

二年の杉関でもなぜなのかわからないが、男子の立場が強い学校だった。昔からそうだったらしいとしか言いようがない。

生徒だけでなく、教師も男性教師のほうが立場が強そうで、話すときなど女性教師は何か遠慮がちだ。

――お互い尊重しあって……って形でないと居心地悪いけどな。でも、そう思うのは少数派なのかもな。今女は被害者っぽいけど、女の立場のほうが強くなれば「これはおかしい」なんていいださないだろうし……となりゃ、女の立場を強くしようなんてとても言えない。圧迫されるきっかけを作るだけだもんな。

サッカーしながら考えるような話だろうか。

よそ見と考え事で集中していない杉関。

それでも自分たちのボールのほうは見ている。

が、流石に関係ない女子グループのボールにまで意識が行っていなかった。

さほど広いグラウンドでもないので、端でバスケットをしていた女子たちが徐々に中央に寄ってきていた。

サッカーに集中している男子なら気づく余裕もある。しかしサッカーしつつ考えつつでは、さらに関係ない女子の動きにまで目がいかない。

女子の事を考えているとはいえ、それはあくまでも「女子全体」の話で、今グラウンドにいる同級生一〇人ほどを直接注目はしていないのだ。

「行くよ！」

叫ぶのは、杉関のクラスメートで、「グラビア」というあだ名で呼ばれている少女新本。美少女といえるギリギリの容姿だが、顔よりスタイルが注目される。バスケットボールほどではないが、野球ボールよりははるかに大きな乳房の持ち主。だからグラビアなどと呼ばれる。

その新本が、仲間に向けてボールを投げる。

ブルン、と巨乳が揺れるが女子はそんなもので幻惑されない。いや、腹が立つことはあるかもしれない。

ともかく、飛んでくるバスケットボールを受けそこなう女子。

勢いよく飛ぶボールの先にいたのは杉関だった。

「あ、杉関！」

「え？　おぐっ」

振り返る杉関。前を向いていれば、尻に当たるだけだった。

それが不用意に声をかけられて振り返ったために、前のほうに当たってしまう。

固いバスケットボールがグニュ、と柔らかい肉ボール二つを押し潰す。

女子が投げ、ある程度飛んだボール。大した勢いはない。

しかし、腰を引き、動きを止める杉関。

――うわ、嘘だろ。いや、軽かった、軽かったよな？　だから……あ、だめだ……痛みが……

「ぐぬうううう」

股間を抑えるのが精いっぱいで、激痛に身動き取れなくなる杉関。倒れる余裕もない。

それを見て、女子たちが集まってくる。

「ごめんごめん、大丈夫？」

「ちょっと当たっただけでしょ、大げさ」
「あれ？　っていうか、やだ……」
杉関は男子の端のほうにいて、散らばっている男子たちより大多数の女子のほうが近かった。
腰を引いて動きを止めた杉関に、当然ボールを目で追っていた女子たちは全員が気づく。
一方、男子らはサッカーボールを追っていたので端にいた杉関の異変には気づかない。
いつの間にか、女子に囲まれる杉関。
股間を抑え、顔をあからめる。
「いや、大丈夫だから」
「動けないじゃん」
「ごめん、そこ、当たったんだ？」
「ぷっ、ほかの所なら男の子だし、大丈夫なんだろうけど……そこはきついんでしょ？」
「男だから余計にね……ぶぶ」

「って言うか本当にその……ゴールデンボールに？」

「そりゃそうでしょ」

　クスクス笑いながら、肩を震わせ。大笑いするわけにもいかず堪える女子たち。

　半円形でクラスメイトが囲まれていることに気づいた男子たちも近づいてくる。

「え、どうしたのかって？　説明しにくいわねえ」

「女の口からはね……」

　男子たちと、股間を抑えて動かない杉関をちらちらと見比べつつ、笑いをこらえる女子たち。

　女子よりよほどそこへの打撃に敏感な男子らは杉関の格好で何が起きたのか大体察する。

「あ、気づいた？」

「バスケットボールが杉関のマイボールにね」

「おぐっ、ぐぬううう、とか言ってたよね」

「ぎゃははは、言ってた言ってた！」

　真っ赤になる杉関に、なんとなく腰が引ける男子たち。近くにいた数人で、大多数はまだ気づいていない。

　というか女子の集団などにあまり関心がなく、サッカーに夢中だ。

　その横で、数人の男子を囲んで女子らが腹を抱える。

「明日から杉関こっち側だったりして。女子側！」

「ちょっと！　そこまで勢いついてないって！　っていうか薬あるから平気だしね」

　ナノテクが発達して、睾丸ぐらいなら一〇秒で治る薬がコンビニで売っている世界である。

「玉、お腹に入ってたりして」

「玉って！」

「いや、だって玉だし……ねえ」

「っていうかお腹に入るって」

「よくわからないけど、入るんだよね？」

　いきなり聞かれ、男子らがしどろもどろにうなづくなりなんなりする。

　その間も、身動き取れない杉関に女子たちはさすが多少は心配そうな顔を見せる。

「杉関まだ動けない？　男なんだからしっかりしなさいよ」

「いや、男だからしっかりできない状況なんだって！」

「女なら全然平気だよね」

「っていうかちょっと前に私もぶつかったんだけど……何ともないし」

「ぎゃはは、私も。だってねえ、顔とかお腹に比べたらそこ別に守るほどでもないし」

「むしろ女なら頑丈な部分だし」

「男だって頑丈だと思うよ、**ボール取ったら**」

「それ男じゃなくなるから！」

　どっと笑いだす女子たちに、居心地が悪い男子ら。

　杉関の親友牛野はちらちらと友人を見つつ、青ざめる。

　――なんだよ女子ども。玉に当てといてこの反応？　軽すぎるだろ。そりゃ潰れても治るだろうけど。問題は潰れる潰れないじゃなくて痛いってことじゃないか？　これだから女はだめなんだよ。うさぎ県の女ってこういうの多いらしいけど、うちの女子もそうなのかよ。

　ドＳ女子の割合が世界一多いといわれるうさぎ県である。

　とはいえ、誰もが「玉蹴らせろ！」というわけではない。あくまでも割合が多いという話だ。

　が、もともとそういう「気風」というか「気質」がある土地柄なので、何かきっかけがあると普通の土地より盛り上がりがちだ。

　と、巨乳娘グラビアが加害者としての責任感か、杉関の背中を押す。

「復帰できそうにないから杉関、私らが保健室に連れて行っとくね」

「っていうか、保健室いる？　ボールが当たっただけだよ？」

「女子にはよくわからないけど、まだまともに動けなさそうだし」

「受けるわ！　いや、受けちゃだめよね」

「でも受けるよね」

「普段威張ってるだけにね」

　新本たちクラスの女子一〇人にゆっくりと歩かされ、保健室に連れていかれる杉関。

　唇を噛み、歩く。

　――ぬおおお、太ももが玉を……大した勢いもなかったのに……玉だけはどうしようもない……

「もっと早く歩けないの杉関？」

「背は高くないけど、がっしりしてて力ならクラスの中じゃ上のほうだよね」

「キモオタだけど……」

「あ、オタクって変態だからゴールデンボールが大きめだって」

「ああ、デカいからダメージも大きいと」

「でもオタクがデカくても無駄なような……おっとっと」

　他の男子らの目を気にせず、廊下を歩く女子たちはガールズトークのノリだ。

　女子より内またでゆるゆる歩く杉関の後ろで笑うグラビア。

　――女だけみたいに盛り上がっちゃうわね、男子がいるのに。金的をやられて無力化された男は半ば去勢状態って感じるのかな？　あ、もともとキモオタの杉関は男扱いじゃないとか？　って、そこまでのことはないかな？　っていうか遅いよねえ歩くの。ここまでダメージ食らう？　ボールが当たっただけだよ？

　加害者の責任として、後ろを歩いているグラビア。他の女子からちょっと遅れてくる。ので少し焦る。

「杉関、頑張って」

「んんん」

　頬が引きつるグラビア。

　――いや「んんん」って……マジでそこまで痛いの？　わかんねー、タ〇キンの弱さわかんねーだって女の子だもんねー、他所の学校行ったギャルの友達が「男子と喧嘩になったら金蹴りで楽勝。むしろ女子より簡単に勝てる」って言ってたけど、あれ本当なのかも。

と、廊下の角を曲がる。女子たちが前に進んでいく、前から誰かが走ってくる音。

男子だった。

どけどけ、と勝手なことを言って走り去る。

油断していた女子が押されて、後ろの女子に当たる。

「あっ」

腰を引く。さほどの動きではないが、それを見た女子がぶつかってきたと誤認して過剰に腰を引く。

勢いよく後ろに当たる。

ボン、と柔らかい女の子の尻が当たっただけでどうということはない。

「おぐうううううっ！」

ただし、それは先ほどから金的のダメージがやっと抜けそうになっている杉関の股間以外の場所に当たった場合の話だ。

「あ、ごめん。あ、杉関か」

よかった、というニュアンスを出す女子。

なぜよかったかというと、女子より男子のほうが頑丈なのだから別に当たってもいいだろうということ。

それはほぼその通りであるが、唯一例外になる場所にぶち当たっていたことに気づかず彼女はまた歩き出す。

「ふんぐうううう」

　唇を噛み、真っ青になる杉関。汗が噴き出す。ボールが当たった時より勢いよく、柔らかいが重いものがぶつかり、さらに先ほどのダメージが抜けていなかったことなどで、より重度のダメージを追う。

　吐き気と眩暈がして、ついにその場に転がる。

「え？　ちょ、なんで？」

　振り返って驚く女子。

　ちょうど曲がり角の向こうなので、倒れた音に気づいてもまだ前のほうの子らは何が起きたのかわからない。

　口を押え、震えるグラビア。

　後ろにいた彼女には何が起きたのか見えていた。

　――いやいや、膝蹴りとか、パンチとか、爪先で蹴るとか、掌で握り潰すとか……金の玉への攻撃はいろいろあるけど……ドンケツで玉潰しって！　そんな攻撃ある！？　あるわけないよね、ドンケツなんて攻撃じゃないし。でも、た、タマタマへなら攻撃になるという……これは盲点……いや、男女だと背丈が違うから、なんで当たったのか……あ、へっぴり腰で高さが下がってたんだ。

　考えつつ、杉関を見下ろす。

　――大丈夫？　痛くない？　いや、明らかに死ぬほど痛いんだろうね。でも女にはない臓器だから全然よくわからない……っていうか笑いそうになるから声もかけられない。見ることしかできないよ、ごめんね……

　杉関はそんな思いなどとは無関係に、股間を抑えて丸まり、歪んだ顔でうめくしかない。

「タ〇キンがあああああああああああ」

「ぶっ、ぎゃはははは！　た、「タ〇キンが」ってそのままだし……っ」

「ちょっと、紹子どうしたのよ！？」

「あんた強くぶつけ過ぎたんじゃ？」

「いや、なんか今、私のお尻ぶつかったんだけど……え？　まさか？」

「そうそう、それよ！　ぶつかってた、ここに！」

　パンパンと、遠慮なく股間を叩く新本紹子、グラビアのあだ名にふさわしい形のいい巨乳が揺れるが、それにも股間を平気で叩く姿にも女子らは何の感銘も受けない。

　転がった杉関を囲み、頬を引きつらせながら必死で笑いをこらえる。

「お、お尻が当たっちゃったんだ……その、金の……」

「キャン玉さん弱すぎるわねえ」

「っていうか、どのぐらいの勢いで？」

「いや、こう素早く引いただけで……ドンケツよドンケツ」

「ドンケツで倒れちゃうんだ？　勢いで倒されたんじゃなくて、痛くて立ってられなくなると」

「や、やばい……笑っちゃ悪いのに」

　真っ先に気づいたグラビアはもう限界に近かった、杉関を見ることもできず、壁を向く。

　――だ、ダメだよ……笑っちゃ……だって杉関、金ちゃんやられる理由とか全然ないんだから。セクハラでもしたんなら「キャン玉潰れても報い。すぐ治るんだからいいでしょ」って大笑いだけど…

…大体潰れてないし、たぶん。でも今の杉関はただの事故だもん。事故笑っちゃ悪いよ。みんななんで笑いそうなの？　いや、私も笑いそうですけどね？　だってあんなビクビク痙攣する感じで、変なうめき声とか……女なら絶対あんな反応しないのに、男はしちゃうんだ？　タマタマさんやられたら？　って考えたら笑うしかないし……でも我慢しないと。

痙攣するように、必死で笑いを抑える女子たち。

もうほぼ笑っているのと変わらないだろう。

転がったまま、それを目だけで見上げる杉関。

――な、何がおかしいんだよ……っていうかさっきグラビアの奴、股間バンバン叩いて……あれ痛くないのか？　俺絶対無理、だってあんな……一生あの勢いで股間は叩けない。だって玉あるんだし……玉無しは楽でいいよなあ。ああ、痛てえ……ケツ当たっただけでこんな……でもすごい勢いだったし……吐き気がする、気持ちわる……でもここまでやばい感じなら、こいつらも心配するだろ。いや、心配してもらってもこれといった足しにはならないけども……

何とか、笑いを堪えきる少女たち。

深呼吸したり、目をそらしたりしてやり過ごす。

笑いの山を何とか越えた感じだ。

「えーっと、杉関、大丈夫？　その……その……あの辺、大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃない……」

「あ、そうだよね！　大事なところだし……その、男の急所だもんね？」

「そうそう、キャン玉。男のキャン玉」

「ちょっ、やめてよ！　っていうか、男のって……男にしかないし！」

「ドンケツでこれってやばいもんぶら下げてるわよねえ……」

「ぎゃははは！　ぶら下げてるって！」

「一々受けないでよ！　ぶら下げてるとしか言いようがないでしょ？」

「そりゃそうだけど……ぷっ、でもねえ」

余計なこと言うものがいて、また山が襲ってくる。

それでも、何とか抑える常識人の少女たち。「痛いらしい」という知識はあるし、目の前で転がって動けないクラスメイトがいる。そしてそういう目に合う理由はない、事故による被害者なのだ。

なぜか笑ってしまうが、笑ってはいけないことはわかっている。

グラビアが、震えながら目をそらす。

――ダメダメ、笑っちゃ。でも本当にドンケツでこれって……痛くて倒れたことないよ私。っていうかそういう人見たこともないけど。その初めの人が「車で跳ねられた」とか「ナイフで刺された」じゃなくて**「ドンケツ食らった」**ってマジっすか！？　タマタマに当たったからってねえ。タ〇キン弱すぎる、笑っちゃ悪いけど笑っちゃうよこれは……

笑いを抑え、お互い押しあったりしながらクスクスと笑いを漏らし、肩を震わせる女子たち。

――ボールぶつかったのぐらい、我慢すれば良かった。そうすりゃドンケツはなかったのに……た、玉が……

「ほら、立って杉関」

「あ、ああ……ぐうううううう」

うめきつつも、玉が潰れたわけでもない。引っ張られればどうにか立つぐらいはできる。

肩を支えられ、よろよろと歩かされる。

「ぐ、お」

「やだ、歩くと響くの？　その……部分に？」

「内股で……女の子みたいに歩いて、よっぽど痛いのね」

「女の子みたいって、シャレにならないよ」

「いや、潰れてないでしょ？」

「た、たぶん……」

「そりゃそうよね、女の子のお尻でグチャっといくとか男として」

「そんな脆い内臓、構造上やばいでしょ」

「そうよね、そんな脆いもん外にぶら下げとくとか」

　ガールズトークに顔を赤くする杉関。

　――おいおい、金的の被害者にキ〇タマディス聞かせるか？　ディスというよりいじりか？　ああ、玉が痛い、腹が痛い、息苦しくなってきた……

　それでも、半ば無理やり歩かされる。

　その押しの強さの理由はとしては「保健室に届けなければいつまでも付き合わねばならない、それはめんどくさい」というのが大きかった。

　すでに学校は終わり、放課後なのだ。いつまでも付き合っていられない。

　――　一様心配して、保健室に連れて行ってくれようとしてるだけましだけど……なんとなく微妙な気もする。急かし過ぎのような……

　思いつつ、内股で歩き続けるしかない杉関。

体験版終わり

この後杉関誤解から金的リンチとチ〇コ写真を女子全員に共有されるＣＦＮＭ展開

そして次の日、ついに男尊女卑の学校で男女の決戦が行われ、

全男子が金的リンチでボロボロにやられます。

女子の勝ちかと思ったとき、一人だけ隠れていた杉関が見つかり、

女子全員に玉潰しを食らいます。

製品版でお楽しみください。